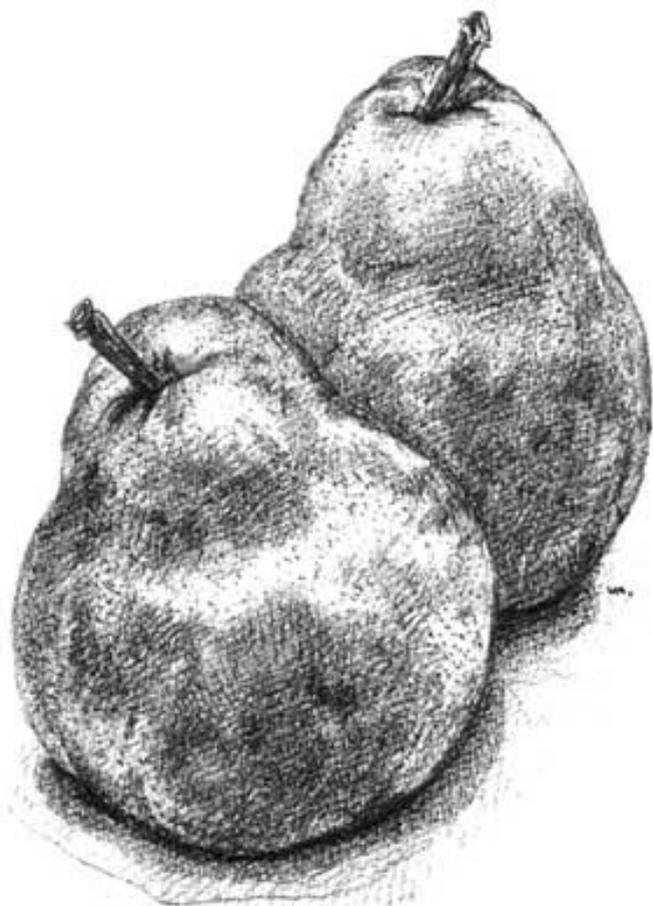


昭和43年7月1日創刊
平成22年3月5日発行(毎月5日1回発行)
第30巻3月号(通巻606号)

風土



3

針 供 養
神 蔵
器

石 打 っ て 火 の と び つ く や 牡 丹 の 芽

雪 女 郎 馳 せ 参 ず る に 雪 足 ら ず

豆 打 っ つ や 善 人 な ほ 悪 人 を や

梯 子 一 つ 寝 か せ て あ り ぬ 霜 柱

一 つ 見 て 三 つ 四 つ 露 の 臺 五 つ

残雪の伸び縮みして山兔
猫が木に登りて寒の明けてをり
死の前か後か寒九の梅匂ふ
寒明くやハワイ・コナーブラックで
若冲の裏彩色や白椿
水取や手の甲にうく花菜漬
子らの声日向にあふれ針供養



竹間集

同人作品



繭 玉 小林清之介

去年今年米寿卒寿の間にゐて
ズボン下逆に穿いたり着衣始め
元日も旧年つづきの無精髭
吠え合うて隣家我が家の犬初晴れ
落しても虎の繭玉すぐ起きる
眉しらが目立つ正月鏡かな
新しき年の上下の嚏と屁

冬の霧 田村すゝむ

草原の風が風追ふ枯尾花
忽ちに一村を消す冬の霧
冬落暉空入れ替る湖の色
亡妻宛に郵便の来る十二月
雪吊りは和傘の形の半開き
水尾のどの径行くも柚子明り
今日の日を山に傾げて柚子明り

高さあり 瀬戸 悠

止り木に睡る梟師走来る
こゑあげて人の死に目の冬の鵞
それぞれに寝首たがへし海鼠かな
極月の靴屋に皮の匂ひあり
毛皮着てユダともならず侍りをり
十二月地下鉄にチェ口運び入れ
墓ほとり枯鶏頭に高さあり

寒 旱

塩山 博久



初氷守衛と交す二三言
千枚漬に交す時候の京言葉
クリスマスライトアップの空しさに
年ごとに母に似て妻年用意
朝焼けの窓開け放つ霜の花
道に鳴るキャリーバッグや寒早
花殻を探す木鉢日脚伸ぶ

山 茶 花

代田 青鳥

山茶花や抜け道をして花零す
うかうかと駐車違反を十二月
守りたきもの無くなりし冬すみれ
どうでもよい事ばかりして七日かな
ガラス張りの客間に目覚め大旦
カレーパンよく売れてゐる四日かな
ささやかに生きて三年日記買ふ

竜 の 玉

関根 洋子

枯れ蓮当麻曼荼羅絵巻かな
捨てられし如き石廟竜の玉
竜宮城見し魴鱈を捌きをり
大年の火の道を行く山頭火
袈風死す刻のありにけり
武士の裔のをんなや葉喰
蓮の骨水のひみつを見てしまふ

雪 の 声

小野寺節子

侘助の咲けば桂郎ここに居る
「小野寺節子」の名無駄にするなど雪の声
新入会員話せば親し帰り花
持ち畠守る町なか葱太る
園丁の枯木卸しに鳥騒ぐ
老夫婦大根引きぬる日和かな
雑木山眠ればばやく鳥がゐる

綿 虫 と

— 田村すゝむ —

葛 城 の 里 の 小 春 を 訪 ね け り
綿 虫 や 西 行 堂 へ 息 を 継 ぐ
落 葉 浄 土 小 幅 に 西 行 塚 の 前
西 行 似 雲 向 ひ 合 せ の 塚 紅 葉
綿 虫 と 西 行 庵 の 趾 に 佇 つ
冬 木 芽 の ふ く ら む 西 行 桜 山
冬 帽 子 胸 に 西 行 絵 巻 か な
千 両 の 丈 に と ど か ぬ 巴 塚
翁 堂 を 巡 る 途 中 の 雪 蛭
武 家 床 の 二 畳 台 目 や 実 南 天

等持院

義仲寺

山河集

同人作品



神蔵
器選

冬に入る机に黒き眼鏡ケース
十并 三乙

こぼしたる錠剤白し冬の朝
横書の多くなりたる年賀かな
雪来るか正座して墨磨りをれば
金子兜太の養生訓や読始

三冬の冬の奈落を出勤す
伊藤 紫水

一徹に老いたる父のちやんちやんこ
終電の我を待ちをる雪女郎
一天を月も旅せり神の留守
三年日記のページより書き始む

弾かざれば鳴らぬピアノや冬館
生田恵美子

柚子湯出て口なめらかでありにけり
シクラメンもつとも燃ゆる色を買ふ

凍土の下の火山灰土埋めごぼう
大根の曲りは別の列に置く

タラップを降り西安の雪景色
丁藤はるみ

冬の蝶よぎる大雁塔の前
華清池の奥の日だまりあたたかし
どの顔も威厳や冬の兵馬桶
鐘楼の最大級に冬月射す

焼き締め壺に火の色冬座敷
高橋まき子

待ち合はす十分前や雪催
白菜を丸ごと使ふレシピかな
バンザイの形で脱がす子のセーター
動物園のふれあい広場冬暖か

◇特別作品◇(抄)

春を待つ

村田くにいち

絵馬堂の絵馬一つづつ春を待つ
初日さす光の道の汀かな
若水や朝日將軍産湯の井
手斧始上州世良田東照宮
七種の一つ侍らせ塞の神
ふくよかに松の内なる阿弥陀仏
待春の碑の石選びけり
供養碑の予定地鐘の冴ゆるかな
浅春や五分足らずの渡し舟
新聞紙畳めば日脚伸びてをり

風土独語／神蔵器



金子兜太の養生訓や読始 土井 三乙

「金子兜太の養生訓」は黒田杏子さんの著作と聞いているが、私はまだ読んでいない。

森澄雄、大正八年二月二十八日生まれ、ボルネオに転戦、二十一年に復員している。

金子兜太、大正八年九月二十三日生まれ、トラック島で終戦、二十一年に復員している。

澤木欣一、大正八年十月六日生まれ、満洲牡丹江を経て、二十年釜山で終戦、同年十一月復員している。

三人のうち澤木さんは先年亡くなり、森さんは五十七年、脳血栓で倒れたが、車椅子の生活でも句境はすでに自在の境地に入っておられる。兜太さんはひとりますます矍鑠として活躍している。

大正七年はスペイン風邪が大流行して、そのためか翌八年の出生率は極端に少なかったと聞か、生前から選ばれたの三人とも大正八年生まれ、稀な長生き、それぞれ過酷な戦争体験を持ち、戦後の苦難な時代に堪え、俳句一途に生きぬいて来た。

「金子兜太の養生訓」には興味を引かれているが、数年前、テレビであったか、兜太さんが健康のため「竹踏み」をしておられる話をされていた。私も早速、竹踏み器を買って来て、それ以来毎日、朝食後百五十から二百回足踏みをし、後、軽く体操し深呼吸をしている。兜太さんの生きる力、「気」を盗みたい。

風呂吹の煮えて根岸に届けたし 池田加代子

子規庵での蕪村忌は、明治三十年十二月に初めて開かれた。「ホトトギス」誌上に子規自身が書いた記事によると、

「……会する者二十人、一同庭前に於て撮影す。終つて運座を開く。室狭くして客多し、火鉢足らず、座布団欠乏す。けだし草庵ありて以来第一の盛会なり」とある。

風呂吹の一きれづつや四十人 子規

この句は明治三十二年の三回目の蕪村忌である。出席者は二倍になっている。二十人でも狭過ぎる子規庵になんと四十人、虚子、鳴雪、碧梧桐、左千夫、不折、為山、漱石もロンドン留学の前の年だから出席していたかも知れない。何れにしても今日の歴史にのこる錚々たる人ばかりである。そんな人たちがお互いに身を細め、詰め合つて、ほうほうほうと熱い一切れの風呂吹を有難くおしいたいでいるのである。

風土集



神蔵器選

風呂吹の煮えて根岸に届けたし 横浜

池田加代子

白扇を開きしやうに千枚漬

湯治場の渡り廊下や霜の花

消毒液置く霜月の美術館

柗の花のやうなる老い願ふ

施餓鬼堂は八角造り霜の花 東京

林 いづみ

神木の目どほり三十尺初氷

冬深む音楽寺に日の匂ひ

日本武尊伝説青鷹

凜と張る空一枚や冬木立

一力の赤の漆喰十二月 京都

西村 雪園

事始舞の宗家の門構

片のれん揚げて妓を待つ事始

北側は冬目の当たる八坂まで

ゆりかもめ賀茂一望の四条橋

塞かれては澄みゆく水や神の留守 東京

柿沼 盟子

着ぶくれて顎の短くなりしかな

ビル街の遠近ひずむ雪催ひ

水盤の水動かざる冬座敷

残菊や庚申塚に径出合ひ

福助の耳に日あたる年の市 高槻

浅田 光代

十二月のまん中にある五里の塔

大根焚く荒ぶるころをんなにも

オリオンの下に二合の米をとぐ

歳晩の日をたてよこに竹箒 札幌

岡田 真澄

煤掃くや掴みてをりし仏の手

煤払ふ箒の先の疲れかな

雲水の雪踏みつゆく文学館

枯蘆の水の辺りの涅槃かな

古曆ひとつの余白ありにけり